

# 太田俊雄とロイス・クレーマー

山 田 耕 太

## 1. はじめに

私は今までに敬和学園の教育理念の背景として、敬和学園高校初代校長の「太田俊雄の宗教教育思想」を掘り下げてきた。すなわち、第一に、ノースセントラル大学（North Central College）と福音神学校（Evangelical Theological Seminary）での留学時代（1949-1952年）に学んだブッシュネルやミラーの宗教教育を明らかにし<sup>(1)</sup>、第二に、旧制中学英語教師時代（1935-1949年）に、多大な影響を受けた大正リベラリズムの中から誕生した小原国芳、羽仁もと子、河井道の宗教教育の思想と実践を明らかにした<sup>(2)</sup>。第三に、旧制中学生時代（1925-1931年）に私立岡山巒で出会い決定的な影響を受けた柴田俊太郎の宗教教育の実践を解明した<sup>(3)</sup>。第四に、太田俊雄に多大な影響を与えた私立中学岡山巒時代の藤井豁爾校長の教育実践を明らかにし、その背後にある中江藤樹と熊沢蕃山に遡る岡山藩学校と閑谷学校の教育理念が「心の教育」の一つの根にあることを明らかにした<sup>(4)</sup>。第五に、もう一つの根である父母の宗教である金光教に光をあてた<sup>(5)</sup>。

太田俊雄は、法政大学夜間部で英語教師を目指している時にロイス・クレーマー宣教師に導かれてキリスト教に回心した。その生涯はキリスト教回心以前<sup>(6)</sup>と回心以後<sup>(7)</sup>に大きく分かれるが、キリスト教に導く準備をしたのは柴田俊太郎である<sup>(8)</sup>。本稿では、太田俊雄とロイス・クレーマーの関係について述べてみたい。

## 2. ロイス・クレーマーの生涯<sup>(9)</sup>

太田俊雄はクレーマー宣教師について、次のように簡潔に紹介している。

クレーマー女史は、40年近くを日本の宣教に献身した人で、ライシャワー教授のご両親と協力し、今から50年前に〔注、1920年に〕、日本聾話学校を創立し、同校の「お母さん」と慕われている人。日本の聾教育の草分けをした人として、その道の人にはよく知られている<sup>(10)</sup>。

### (1) 誕生から来日まで

ロイス・クレーマーは、1891年7月7日にイリノイ州ネイパヴィルに、父ハワードと

母リディアの四人姉妹の長女として生まれた。父ハワードはユニオン神学校と福音神学校を卒業後、シカゴ空港南西40キロの所にあるネイパヴィル福音教会の牧師を務め、近くのノースセントラル大学のチャペルでも説教し、福音神学校の理事も務めた。

福音教会は、1803年にジェイコブ・オルブライトによって始められたプロテスタントの教派であった。1856年の「成全（完全になる）の教義」の論争に端を発し、1887年には（1）地域セクショナリズム（古いペンシルバニア教区vs.新しいオハイオ教区・イリノイ教区）、（2）英語圏とドイツ語圏の対立（古いドイツ語公用語圏vs.新しい英語公用語圏）、（3）監督権限の強化とそれに対する反発、（4）監督間の分裂、（5）新しいアメリカの民主主義と古いドイツの中央集権主義の対立などにより「福音協会」（エヴァンジェリカル・アソシエーション、E. A.）と「福音連合」（ユナイテッド・エヴァンジェリカル、U. E.）の教派に分裂し、1922年に福音教会として再統合し、1946年に福音教会と同胞教会が合同して合同福音同胞教会となり、1968年にはメソヂスト派に吸収合併された。

多数派の福音教会派は高等教育機関としてペンシルバニア州ラディングに「セントラル・ペンシルバニア・カレッジ（その後、オールブライト・カレッジと名称変更）とスキルキル・バーレイ神学校を建てた。他方、少数派の福音連合派はイリノイ州ネイパヴィル（シカゴ南西40キロ）にノースセントラル大学と福音神学校（メソヂスト派との合同に伴い、後にギャレット福音神学校に吸収合併）を建てていった<sup>(11)</sup>。

ロイスはネイパヴィルのエルスワース小学校、エルスワース中学校を卒業後、父のオハイオ州クリーブランド教会への異動に伴い、クリーブランド・セントラル高校を卒業、1911年にクリーブランド市保母養成所を卒業し、アレクサンダー・グラハム・ベル聾学校に勤務、1917年に福音教会の宣教師として日本に派遣され、26歳で来日した。翌年には妹（次女）のセーラも福音教会の宣教師として日本に派遣された。

## （2）幼稚園事業から聾話学校設立へ

クレーマー宣教師は当初は、福音教会の幼稚園事業のために派遣され、2年間の日本語教育の後、1919年には牛込福音教会の幼稚園監督を始め、福音教会やカナダ・メソヂスト系の幼稚園指導にも深くかかわっていった。1906年に組織された日本幼稚園連盟（JKU）では、1923年に日本代表としてミネアポリス大会に出席し、1927年には会長に選ばれ、組織運営を宣教師から日本人に移し、大会や記録の言語を英語から日本語に変えた。

クレーマー宣教師は来日翌年にキリスト教婦人矯風会大会で、長老派のオーガスト・カール・ライシャワー宣教師夫人のヘレン・ライシャワーと知り合った。オーガストとヘレンの間には、ロバート、エドウィン（後の駐日大使）、フェリシアという三人の子がいたが、

フェリシアは1歳の頃、風邪をこじらせて肺炎に罹り、高熱を発して、そのために聴覚障害者となってしまった。

ライシャワー宣教師夫妻は、フェリシアの聴覚障害を何とか克服する道を求めて、東京聾啞学校の小西信八初代校長を訪ねた。ライシャワー夫妻は小西校長の助言に従って、最新の読唇術と発声法の訓練のためにイリノイ州立師範学校付属小学校聾口話部に入り、ヘレン夫人も同校師範部に入って口話法を学んだ。小西校長の助言に対する感謝の印として、ライシャワー宣教師は明治学院での宣教・講義・運営、1918年に創立した東京女子大学の開学準備と運営に奔走していたが、アメリカで口話法を実践してきたクレーマー宣教師の助力を仰いで、1920年に牛込福音教会で（後にライシャワー・クレーマー学院という法人となる）日本聾話学校を開校した。それは1926年に世田谷・上北沢に専用校舎を建てて移転していった（戦後に町田市に再度移転した）。

太田俊雄がクレーマー宣教師に出会ったのは、1932年のことであり、幼稚園事業も日本聾話学校も軌道にのっていた頃であった。1940年には日本聾話学校創立20周年を祝い、クレーマー宣教師も感謝状を授与された。

### （3）戦時中の抑留生活

その後も、クレーマー宣教師は軍国主義化していく日本で宣教活動を続け、1941年に太平洋戦争の勃発した時には、多くの宣教師が祖国に強制送還されたにもかかわらず、日本に残留することを決意し、敵性外国人として東京の抑留収容所に収容された。敵性外国人の抑留収容所は全国で18カ所あり当初は約600人が収容された。クレーマー宣教師は最初に小石川の宣教師館、1942年9月からは玉川・田園調布のすみれカトリック女子修道院（すみれ家政女学院、約100人収容）、1942年10月からは大森・田園調布の聖フランシス修道院（最後の帰還船に乗らなかった62人収容）、同年10月から関口台町の聖マリアカテドラル裏手の小さな修道院（1944年5月36人収容）、1944年5月に関口台町の修道院が空襲で火災になり、下落合の聖母病院に移動し（13人収容）、戦争が終わるまでそこに滞在した。日本での殉教を覚悟しての滞在であった。

### （4）再来日から帰国へ

戦勝直後の1945年9月にはアメリカへ帰国し、2年間の休養の後に、1947年9月に再来日し、日本聾話学校などで宣教師としての活動を再開し、日本聾話学校の理事に就任した。再来日の最初期には、戦後の食糧、衣料等の救援物資の斡旋や仲介、日本聾話学校の幼稚園や学校運営の教育資金の支援を在米の慈善団体に働きかけた。1951年には日本政府から36年間にわたる社会福祉教育の実践を称えて勲四等瑞宝章が授与された。

1955年にはヘレン・ライシャワー夫人が亡くなり、日本聾話学校理事で福音同胞教会総理のP.S.メイヤー博士が40年余の宣教生活を終えて帰国した<sup>(12)</sup>。1957年4月にクレーマー宣教師は牛込矢来町25番地の戦災で焼失した牛込福音教会跡地に聾話者キリスト者のために日本基督教団エパタ教会を設立したものの、6月に定年で40年間の宣教活動を終えて帰国した。9月にエパタ教会にクレーマー記念礼拝堂が建てられて今日に至っている。

クレーマー宣教師は帰国して3年間はネイパヴィルの実家に滞在していたが、1960年にはアイオワ州シーダー・フォールズのウェスタン・ホームという老人ホームに妹のセーラと共に移り住んだ。1961年にはフェリシアの兄のエドウィン・ライシャワーが駐日大使になった。最晩年は平安な毎日を送り、1976年4月23日にウェスタン・ホームで亡くなった。

### 3. キリスト教への回心

#### (1) クレーマー宣教師との出会い

太田俊雄がクレーマー宣教師と出会ったのは、1932年7月のことであった。旧制私立中学岡山巒を卒業して、兵役検査に甲種合格し、岡山歩兵第十連隊第二中隊に入営して2週間余りで、極度の乱視であることが判明して、中隊長から「お前はタマ除けには惜しい。銃後にあつて、よりよき奉公せよ。」と言われて兵役免除となった。

そこで、柴田俊太郎のような英語教師になろうと上京して法政大学夜間部に入学した。昼間は郷里の先輩で中学の親友の兄の紹介で、東京日日新聞（毎日新聞）の市内通信員として日本橋界隈の警察署を廻って三面記事のベタ記事を書く仕事に就くことができた。すると間もなく、柴田から一つの小包便が送られてきた。それは聖書であった。扉には柴田の達筆で次のように書かれていた。

求めよ、さらば与えられん

尋ねよ、さらば見い出さん

門を叩け、さらば開かれん

柴田俊太郎

雪枝

太田はその時から求道を始めた<sup>(13)</sup>。

太田俊雄は上京して、かつての旧友たちの仲間に加わり、5人で一軒家を借りて自炊していた。大学へ行く途中の牛込矢来町の福音教会に日曜夕方のバイブル・クラスの案内を

見つけた。英語のたしにもなると思って福音教会に出かけて行くが、教会の敷居が高く、なかなか入れずにいた。日曜日に教会に行こうとすると、友人たちが太田を止めたり茶化したりした。それでも太田は毅然として教会の門を叩こうとして出かけるが、いざ教会の門の前に立つとそうする勇気がなく、何週間もそれが続いた。

4月から始めて7月の終りの週のこと、これが教会に入る最後の試みという覚悟を持って、いつものように教会の前に来て、ついに教会に入ることを断念した瞬間に、聞き慣れたオルガンの音が響いてきた。その音に導かれて初めて自然にスーと教会の中に入って行くことができた。そのオルガンの音は、柴田俊太郎が太田俊雄ら生徒を集めて特別な英語指導を放課後にしていた際に、「君らはア、英語を勉強する限りは、英語国民が愛唱している歌を5つや6つは歌えにゃあいけん」と口癖のように言って教えた讃美歌503番であった。太田はそれが讃美歌であるとは知らなかった。

教会の中に入ると大柄な外国人の女性宣教師が4人の青年たちの前に立っていた。それがミス・ロイス・クレーマー宣教師であった。宣教師の話をうわのそらで聞きながら、思い出していたのは柴田俊太郎先生のことであり、その思い出が走馬灯のように駆け巡っていた。バイブル・クラスが終わって、クレーマー宣教師は笑顔で「ヨクイラッシャイマシタ」と英語で語りかけ、「コノツギハ、クガツノハジメデス」と太田が分かったかどうかを確かめるためにもう一度皆に言ったことを英語で繰り返した。太田にとっては9月のバイブル・クラスが待ち遠しくて仕方がなかった<sup>(14)</sup>。

## (2) 洗礼に至るまで

太田俊雄は、兵役免除となった時に言われた「よりよき奉公」とは何かと考えながら、9月からのバイブル・クラスに出て教会通いが始まった。

「ワタシハ、十ナンネンモ、ニホンデセンキョウシトシテ、ハタライテイマス。ケレドアナタノヨウニ、オトモダチニモ、ダレニモ、ツレラレナイデ、ヒトリデキョウカイニキタヒトハ、イママデ、ヒトリモアリマセンデシタ。」

「ぼくはひとりで来たのではないのです。柴田先生がついていてくださったのです。」

「ヒトリデキョウカイニキタノガ、ハジメテデアッタヨウニ、アナタノヨウニ、シンケンニキュウドウシ、アナタノヨウニ、スナオニフクインヲウケイレテイッタヒトモ、メズラシイデス。」

「それは、何年ものあいだ、柴田先生がぼくの心の田を耕し、福音の種を根気よくまいて下さったからです。」

クレーマー宣教師も太田俊雄も、神の不思議な導きを思った。宣教師は太田が英語で讃美歌が歌えることに驚いた。やがて、太田の「英語の歌」がバイブル・クラスの皆の愛唱

讚美歌になっていった。その年のクリスマスの朝に太田は、牛込福音教会の森田大喜老牧師より4人の青年たちと一緒に洗礼を受けた。

受洗記念に、クレーマー宣教師は太田俊雄にエフェソ書3章20-21節の聖句を書いて送った。

わたしたちが求めまた思うところのいっさいを、はるかに越えてかなえてくださることができるときに…栄光が世々限りなくあるように、アメン

太田は洗礼を受けた感激の涙をぬぐいながらこの聖句の一語一語をかみしめていた<sup>(15)</sup>。これはクレーマー宣教師の特愛の聖句であった<sup>(16)</sup>。

### (3) アメリカ留学

太田俊雄が苦学して法政大学夜間部を卒業した後で、宮城県立古川高等女学校、青森県立旧制青森中学校、滋賀県立旧制水口中学校、大阪府立旧制八尾中学校、私立燈影女学院高等学校で、英語教師をしていたが、上京の折には牛込福音教会の礼拝に出席したことも推測されるが、記録に残されている限りでは、その間にクレーマー宣教師との接点はあまりなかったようである。

しかし、IBC選抜留学生試験に合格してアメリカ留学をするときには、クレーマー宣教師の故郷ネイパヴィルを留学先に選び、クレーマー宣教師の父ハワード・クレーマーが学生向けに説教したことがあるノースセントラル大学で1949年秋から1年学び、その後父ハワードが理事をしたことのある福音神学校の修士課程で宗教教育学を修めるために2年間学んだ。この留学に関しては、恐らくクレーマー宣教師の助言があったと推測されるが、そこには深い絆を感じざるを得ない。太田俊雄にとってネイパヴィルは第二の故郷と言える存在であったと思われる<sup>(17)</sup>。

## 4. 結びに

太田は留学を終えて日本に帰国すると、妻千枝が学んだ東京聖經女学院（日本聖書神学校の前身）の創立者・教授であった小石川福音教会（現・小石川白山教会）の藤田昌直牧師から夜間神学校の日本聖書神学校の教授として招聘され、そこで14年近く教えた。

その後、敬和学園高校の初代校長として招かれ、10年間教えた時に、「母校」（アルマ・マータ）のノースセントラル大学から名誉神学博士号を授与された。これはクレーマー宣教師が日本政府から勲章を受けたことを思い出させると同時に、クレーマー宣教師に端を発する福音教会ならびにその大学・神学校であるノースセントラル大学と福音神学校との

深い愛の絆の一面を見る思いがする。

太田俊雄にとってクレーマー宣教師から洗礼時に送られた聖句は特愛の聖句の一つであったに違いない<sup>(18)</sup>。太田は高校生を引率したアメリカ旅行にはネイバヴィルのノースセントラル大学を訪れ、また個人で旅行した折にも老人ホームに入ったクレーマー姉妹を慰問することを忘れなかった<sup>(19)</sup>。

## 註

- (1) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（1）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第7号（2009年）、115-126頁。
- (2) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（2）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第9号（2011年）、1-10頁。
- (3) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（3）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第10号（2012年）、61-69頁。
- (4) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（4）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第11号（2013年）、1-9頁。
- (5) 山田耕太「太田俊雄の宗教教育思想（5）」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第12号（2014年）、1-9頁。
- (6) 註4、註5、参照。
- (7) 註1、註2、参照。
- (8) 註3、参照。さらに、山田耕太「キリスト教学校教育同盟における敬和学園」『敬和学園大学人文社会科学研究所年報』第14号（2016年）、15-26頁；山田耕太「太田俊雄」鈴木範久編『日本キリスト教大辞典（改訂版）』、教文館、近刊予定、参照。
- (9) 以下の叙述は、依田直也・依田和子『愛は決して滅びない：アメリカ人女性ロイス・クレーマーをめぐる人々』教文館、2005年、による。
- (10) 「わたしの『海外教室』—1969年夏の思い出—」『太田俊雄諸文集』敬和学園高校、2009年、49頁。
- (11) 中村征一郎『東金教会 百年の歩み』「第1編 アメリカ福音教会略史」、日本基督教会東金教会、1990年、29-170頁、参照。
- (12) メイヤー博士は、1909年に来日し、1911年に福音神学校の校長となり、主として神学教育に邁進した。また、ハツラー、フェブライン、ハウク、アンブライトに続いて、1927年から41年まで15年間にわたり福音教会の第5代総理を務めた（中村征一郎『東金教会 百年のあゆみ』「第2編 日本福音教会略史」、171-437頁、とりわけ「第8章 メイヤー総理時代」365-437頁、参照）。
- (13) 太田俊雄『矢と歌』〔再び罪を犯すな〕104-105頁、「出号関」164頁。
- (14) 太田俊雄『矢と歌』「来夕、見夕、勝ッ夕」165-170頁。
- (15) 太田俊雄『矢と歌』「われに来たれ」180頁。
- (16) 太田俊雄『矢と歌』「われに来たれ」181頁、依田直也・依田和子『愛は決して滅びない』284-285頁、他。
- (17) 「わたしの『海外教室』—1969年夏の思い出—」『太田俊雄諸文集』敬和学園高校、2009年、48、49頁。
- (18) 「敬和第35号 見えるもの見えないもの」1970年10月1日『大夫浜卓話（1）』144頁、「敬和第62号 第三回生を贈る言葉」1973年3月1日『大夫浜卓話（1）』250頁、鷹澤昭一「大夫浜卓話に見る聖書」『太田俊雄研究会報』第1号（2009年）、12-29頁、特に23、25頁、「第七回生を送る会」卒業パンフレット（1977年3月9日）。
- (19) 「わたしの『海外教室』—1969年夏の思い出—」『太田俊雄諸文集』敬和学園高校、2009年、49頁。